プロティノスの
「視覚について、または遠くのものが小さく見えるのはなぜか」II-8-(35)

1
1 はたして遠方のものがより小さく見え、そして遠く隔たっているものは少ししか離れていないように思えるのだろうか

2 他方また、近くのものはあるがままの大きさに見え、そしてちょうど実際の距離だけ離れているように見えるのだろうか

5 遠くのものが見ている人たちにより小さく思えるのは、光が視力に合わせ、瞳の大きさに合わせて収縮しようとするからである

7 また、見られるものの素材が遠方にあればあるほど、形相はそれだけいっそういわば純化されて到達する

8 その際、性質と同じく大きさそのものも形相になる

9 そこで、対象のロゴス(条理)だけが到達するというわけだ

10 あるいはまた、われわれが大きさをどれだけあるのか知覚するのは、各部分を逐一通過し、概観することによってである

11 そこで、どれだけ大きいかが知られるためには、その物が現前し、知覚兄あることが必要である

13 あるいはまた、第一次的に観られる対象は色であって、大きさは付随的に見られるだけである

14 だから、近くにあれば、どれだけの広がりで色づけられているかが知られるけれども、遠くにあるばあいには、それが色づけられていることは分かるが、それの諸部分は広がりが縮小しているので、どれだけ大きいかの精確な判定を許さないのである

16 なぜなら、色自身にしてからが、ぼやけてやって来るのだから

18 とすると、大きさもまた

ーーちょうど音声もまたより小さいようにーー

それらの形相がやって来るときにぼやけている程度に応じて、より小さく見えるとしても、何が不思議であろうか

20 というのも、先のばあいでも、聴覚が求めるのは形相であり、大きさは付随的に近くされるだけなのだから

22 しかし聴覚については、果して大きさが付随的に知覚されるのかどうか

23 なぜなら、音声に含まれる大きさは、第一次的には何に対して現れるのだろうか

23 見られる大きさだと、触覚に対して現れるように思えるのであるが

24 いや、大きさだと思えるものについて言えば、聴覚はそれを量的にではなくて、強弱という点から、付随的にではなく、激しさとしてとらえるのだ

24 ちょうど味覚が甘味の激しさを付随的にではなく(とらえるように)

25 他方、音声の本来の意味での大きさとは、範囲である

26 そしてこれは、激しさから、付随的に知覚されうるだろう

26 ただし、正確にではないが

28 なぜなら、それぞれの音の強さは一定であるが、広がりの範囲は、それぞれの音が占める場所全体に広がっていくからである

30 しかし、色は小さいのではなくて、ぼやけているのであり、他方大きさは小さいのである

32 いや、<それぞれがそれであるものに関して、より弱い>ということが、両者に共通なのだ

33 つまり、より弱い色が薄いのであり、より弱い大きさが小さいのである

33 そして、色に伴う大きさもまた、色に対応して小さくなるのである

35 この事情は、多様なもののばあいに、よりいっそう明瞭である

35 たとえば、多くの家や多数の樹木や、その他多くのものがある一つの丘があって、それらの一つびとつが見られるばあいには、見られた個々のものから全体を見つもることができる

38 他方、それぞれのものの形相が届かないばあいいは、視覚は、対象となる大きさを見つもる際に、当の大きさ全体がどれだけあるかを知るための(手がかりを)奪われる

40 実際、近くにあるものでも、それが多様なものではあるが、概括的に眺められるだけで、すべての形相が観察されないばあいには、このものは各部分がその望見に際して見落とされる度合いに応じて、より小さく見えるだろう

42 しかし、すべての部分が見られるばあいには、正確に見つもられてどれだけあるかが知られる

44 また、大きさをもつもののうちで、同色であって、等質的であるものについて言えば、これらもまた、自分がどれだけ大きいかを偽るが、それは視覚の方が各部分を十分見つもることができないからである

46 なぜなら、角部分の差異を足がかりとして立ち止まることができずに、各部分を見つもる際に、つるりと滑ってしまうのである

48 また、遠くのものが近くに(見える)のは、間の距離が、同じ理由で、量的に縮小するからである

49 というのは、その隔たりのうちで、近くの部分がどれだけあるかは、同じわけで見誤られることはないのだが、隔たりの遠方の部分が形相面でどのようなものであるかを、視覚は逐一辿ることをしないので、大きさがどれだけあるかも、視覚は言うことができないであろう

2
1 次に、視角が小さいからという説については、これが正しくないことは、すでに他の個所でも述べられたが、今も次の点を指摘しておかねばならない

3 すなわち、角度がより小さいために、より小さく見えるのだと主張する人は、残りの視角に、外側にある何かを

ーーそれが何か他のものであろうと、とにかく外側に存在する何か、たとえば空気であろうとーー

見る余地を残してやっているわけである

7 では、山が大きくて、視角に余地を与えないで、視角の広がりが見られる対象とぴったり合い、両者が等しくて、視覚がもはや他のものを見ることができないとか、あるいは対象の方が視野を両方向ではみ出してすらいるとすれば、このばあいに人は何を言うことができるだろうか

10 対象は実際よりもはるかに小さく見えるが、全視角で見られているのだから

11 というのは、人が天の半球全体を一望に収めることは、おそらく不可能だろうし、また視覚が注ぎ出て、それを包括するほど延び広がることもできないだろうから

11 さらに、人が天へも目を向けるならば、からはことのことを疑いを残すことなく納得するだろう

15 しかし、人が望むならば、それも可能だとしよう

16 とすると、全体が(半球)全体をちょうど包むこむことになるが、ところが天の見られている(半球)の実際の大きさは、見えるそれよりも何倍も大きい[見える大きさは実際よりもずっと小さい]とすれば、

実際よりもはるかに小さく見えることの原因を、視角の狭小化に帰することがどうして可能だろうか